

展示・収蔵品より

美を知る

325

県立博物館 (秋田市)

たないため、鉱物ではなく岩石の一種であり、岩石学的には「黒曜岩」が正しい名称となる。

ガラスは、二酸化ケイ素を主とする溶融物が急激に冷やされて形成される。自然界ではマグマの急冷によって黒曜石ができる。しかし、マグマの急激な冷却が必ずしも黒曜石を生み出すわけではない。

黒曜石と聞くと何を思い浮かべるだろうか？ 矢じりなど、多くの人は恐らくはるか昔の時代の打製石器を思い浮かべるだろう。黒曜石は鋭く割れる性質があり、刃物の素材として非常に重要だった。金属器が普及するまでは日用品で、質が良く多産した長野県下諏訪町の和田峠産や、北海道遠軽町の白滝産は、交易品として広く流通した。

黒曜石は、天然のガラスである。ガラスは結晶構造を持つことは非常にまれだ。

では、秋田県内でも黒曜石は産出されるのだろうか？ 産地は幾つかある。例を挙げると、田沢湖や男鹿半島、大覚野峠の近辺、北秋田市の米内沢近辺などだ。中でも長さ10センチを超えるものが発見されているのは、男鹿半島と田沢湖のみである。特に男鹿半島は量的に多く、県内最大の産地といえる。現在も容易に発見することができる。

県内の縄文時代の遺跡では、男鹿半島産を用いた打製石器

がしばしば発見される。

男鹿半島では、砂礫岩中や海岸に打ち上げられた礫として黒曜石が見つかる。大きさは最大でも十センチ程度で、多くは数センチである。一般的な黒曜石に比べ透明度が高く、縞状の模様を持つものが多い。透明度が高いのは、鉄など着色要因となる元素が少ないためである。

は透明度が高く、小さなものは光を当てると、淡褐色や黒褐色に透けて見える。色相は含まれる成分の差によって現れる。縞状の流理構造がよく観察できるよう。

縞状の模様は、マグマが流動する過程でできる流理構造と呼ばれるものだ。男鹿半島の黒曜石は42万年前に活動した戸賀火山の噴火に伴い形成されたと考えられている(藤本幸雄、2019年)。その後、河川の浸食運搬作用によって縞川層の砂礫岩中に取り込まれた。

以下、男鹿半島産の黒曜石を紹介したい。

写真①は石器。秋田市雄和椿川付近で出土した。石器製作のため縄文人が打ち割ったものだ。

写真②は、並べて下からライトアップした。男鹿半島産

男鹿半島は県内最大の黒曜石産地として古代の人々の生活を支えていた。現在ではその透明度や構造の美しさから、コレクターの間でもひそかに人気になっている。

(県立博物館学芸主事・鈴木照洋)



男鹿半島の黒曜石

透明度高く縞状模様

